

鈴木 禎宏 / SUZUKI, Sadahiro

文化科学系 / 生活科学部人間生活学科

<http://www.aesthe.ocha.ac.jp/profs/suzuki/>
<http://researchers.ao.ocha.ac.jp/5445568976.html>

生活
文化

対抗産業革命

■ 研究者情報

連絡先

suzuki.sadahiro@ocha.ac.jp

専門分野

比較日本文化論、比較文化史、生活造形論

■ 研究成果情報

近代における対抗産業革命運動の研究

キーワード

バーナード・リーチ、柳宗悦、民藝運動、スタジオ・クラブ運動、工芸論

研究内容

■ 概要（背景・目的・内容）

18世紀後半にイギリスで始まった産業革命は、その後世界各地に波及し、各地の社会的・文化的状況を変えていきました。自然を抽象的な数字や記号体系へと還元し、操作可能な対象と見なすことにより人類は科学技術を進歩させ、20世紀後半までには大量生産・大量消費という物質の豊かさが先進国にもたらされました。

このような、世界をある価値観のもとで画一化させて行くような潮流に対し、世界各地ではそれに「対抗」する形で自らの文化的ルーツを主張したり、あるいは価値観の画一化を批判する動きが近代におこりました。こうした「対抗産業革命 counter-Industrial Revolution」の系譜を掘り起こし、跡づける研究をしています。

■ プロセス・研究事例

具体的には、イギリスの芸術家バーナード・リーチ(1887-1979)のスタジオ・クラブ運動と、柳宗悦(1889-1961)が主導した日本の民藝運動を題材として、対抗産業革命という観点から20世紀の日英の文化史を振り返っています。リーチと柳、及びその周辺の人々は、芸術と生活という観点から、産業革命がもたらす負の要素を批判・是正することを工芸分野において試み、ある程度の成果を上げました。すなわち、手作りの工芸品を作ったり、その美しさを語ったりするという行為によって、言語(記号)化されないものや、意識化されないものの価値、そして身体を通じて自然と接することの重要性を擁護したのです。このようにして擁護された価値観はその後紆余曲折を経て今日まで存続し、様々な生活文化論の立脚点となっています。

■ 潜在可能性（応用・将来展望）

認識対象をある種の抽象的な言語や記号の体系へと還元することで、その対象を操作可能にするという傾向は、産業革命、高度工業化を経て、情報技術革命が進行していると考えられる今日、さらに強まっています。すなわち、リーチや柳が批判した事態は、ある意味でむしろ悪化しているようです。

21世紀における工芸のあり方を見据えつつ、「情報化できないものの価値」について考えていきたいと思います。

特許・著作物等の知財情報、製品化情報、あるいは社会貢献実績

・『生誕120年 バーナード・リーチ 生活をつくる眼と手』展(松下電工汐留ミュージアム,2007年)への企画協力、図録執筆、講演。
・『英国セント・アイヴスへ 東と西 海を越えた絆 バーナード・リーチと濱田庄司』(益子陶芸美術館、アサヒビール大山崎山荘美術館,2003年)への企画協力、図録執筆。

産学官・社会連携の可能性

■ 共同研究